様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 14 日現在

機関番号：11301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011　～　2012
課題番号：23720194
研究課題名（和文）　『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の研究
研究課題名（英文）　The Study of Mongolian Text in "Chu-xue Zhi-nan", Transcribed in Manchu Script at the Late 18th Century

研究代表者
斯欽巴図（SIQINBATU）
東北大学・東北アジア研究センター・教育研究支援者
研究者番号：70590199

研究成果の概要（和文）：

(1) 文献学的観点から、『初学指南』と関連文献との比較研究を行い、相互関係を明らかにした。
(2) 言語学的観点から、『初学指南』のモンゴル語は 18 世紀後半の北京周辺のモンゴル語口語である特徴を明らかにした。
(3) 近代モンゴル語の口語資料として『初学指南』の電子化テキスト、モンゴル語の全単語・語尾索引を作成した。
この成果の一部は『「三合語録」における満洲文字表記モンゴルの研究』[2012]、日本モンゴル学会 2012 年度秋季大会および『日本モンゴル学会紀要』[2013]によって発表された。

研究成果の概要（英文）：

(1) The researcher has analyzed and made clear the mutural relations between the "Chu-xue Zhi-nan" and related materials.
(2) The researcher has identified the material of "Chu-xue Zhi-nan" as a Mongolian dialect around Beijing of the late 18th century.
(3) The researcher has made an electronic text of "Chu-xue Zhi-nan" with word- and suffix-indices of the "Chu-xue Zhi-nan".
The researcher has published one monograph and one article, and made one academic presentation on the subject during the period of this research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：　近代モンゴル語、満洲文字表記、口語方言、『初学指南』、“tanggū meyen（一百条）”、オイラート文語

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究の対象である『初学指南』は、清朝乾隆甲寅（1794）年に北京で出版されたモンゴル語の口語会話学習書であり、乾隆年間に編纂された満洲語口語学習書『tanggū meyen（一百条）』のモンゴル語訳と見られる。そのモンゴル語は、満洲文字で表記された口語であることに大きな特色があり、全 246 頁・102 話からなる本文がモンゴル語と漢語対訳の形式をもっている。同モンゴル語は、近代モンゴル語口語の貴重な資料であるが、その言語の実態は今まで明らかにされていない。

(2) 口語の資料が乏しい近代モンゴル語において満洲文字で表記されたモンゴル語は、研究者たちに注目されてきた。なぜなら、当時の書き言葉として定着していたモンゴル文語には口語の情報が少く、それより文字と発音の対応がはっきりしている満洲文字はモンゴル口語を記録するに適切であったと考えられるからである。近年、清朝統治下の 18 世紀に編纂された一連の「御製清文鑑」や、満洲語とモンゴル語、漢語の対訳辞典『三合便覧』(1780 年) における満洲文字表記モンゴル語について、栗林均氏、内モンゴルの呼日勒巴特尓氏らの研究成果が発表され、そうした満洲文字表記モンゴル語には口語の露出が認められるものの、基本的にモンゴル文語をそのまま満洲文字に置き換えたという結論が出されている。

(3) 『初学指南』表紙には「蒙古語多由口授内地殊難其人因輯是編以便初学孤陋寡聞未敢自信惟同志釐正之幸甚(モンゴル語は多くの場合口頭で教えられるが、内地では教える人が甚だ得難い。そこで初めて学ぶ人のためにこの本を編集した)」とあるように、18 世紀後半に属する『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語は、口語の学習のために編纂されたものである。これについて、W.Grube の "Proben der mongolischen Umgangssprache" [1904、1905、1911]、L.J.Nagy の "A contribution to the phonology of an unknown East Mongolian dialect" [1960] など先行研究において、『初学指南』のモンゴル語がモンゴル文語と異なっている点に注目しているが、満洲文字表記の特徴や口語の実態を明らかにされていない。

(4) 筆者は、博士学位論文において、『初学指南』のモンゴル語の満洲文字表記は、書き言葉としてのモンゴル文語の表記でないこと、また、オイラート文語をもとに制作されたものの非オイラート的な方言や口語の要素が目立つことを指摘した。しかし、これはその類書である『三合語録』のモンゴル語の研究を進めるにあたって行われたものであり、『初学指南』のモンゴル語を全体的に考察し、その言語的特徴をまとめたものではない。つまり、ここで取り上げたのは「トド文字一百条」と対照できる最初の 7 話の内容であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、『初学指南』のモンゴル語を網羅的に考察し、その満洲文字表記の特徴と口語の実態を明らかにし、近代モンゴル語口語の資料において位置付けることである。

(1) 満洲文字表記モンゴル語の表記の規則を明らかにする。『初学指南』のモンゴル語は満洲文字によって表記されている。満洲語とモンゴル語は別々の音韻体系をもつ言語であり、それぞれの正書法と綴りの制約がある。この場合、どのような満洲文字でどのようなモンゴル語音を表しているか、満洲文字ですべてのモンゴル語音を表すことができるか、モンゴル語の表記には満洲文字の正書法と綴りの制限があるかを明らかにしなければならない。(2)『初学指南』のモンゴル語を表記している満洲文字の音韻体系を推定し、表記の規則に基づいてモンゴル語の音韻体系を明らかにする。また、『初学指南』のモンゴル語の全単語・語尾索引を作成し、全単語と文法的語尾の形を網羅的に調査することによって、語彙と文法の特徴を明らかにする。

(3) 音韻・文法・語彙といった言語的な特徴によって、『初学指南』のモンゴル語の基本的な方言の特徴は何かを明らかにする。そのために、同時代の確定的な文献資料と比較し、それらの異同は現代モンゴル語のどのような方言に最も近いのかを、信憑性のあるデータ、記録や、特定の地域に絞られた場合一次資料によって判明する。

３．研究の方法

本研究は、文献学と言語学の二つの観点から、次の四つの方法・手順によって行われた。

(1) 『初学指南』の異本を収集し、テキスト間の比較、校正を行った。具体的に、海外では、中国大連市図書館、内蒙古大学図書館、内蒙古社会科学院図書信息中心、中央民族大学図書館、北京故宮博物院図書館、日本国内では、東洋文庫、東京大学図書館、大阪大学世界言語センターなどを訪れ、『初学指南』の異本と関連文献資料を調査した。

(2) 『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語をローマ字転写して、白話体漢文と共に計算機に入力し、電子化テキストを作成した。これは、予想される膨大なデータ資料を取扱い、言語学的考察・分析を有効に行うためである。すなわち、『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の音韻・文法・語彙的特徴を究明するにあたって、テキスト間の比較、検索プログラムによる音韻的要素や文法的語形・語尾の抽出などを行うために、満洲文字表記モンゴル語にローマ字転写を施し、電子化テキストおよび名詞・動詞

語尾索引を作成した。

(3) 同時代の確定的な文献資料との間で網羅的に対照し、『初学指南』のモンゴル語の音韻・文法・語彙における独自の特徴を考察した。つまり、『初学指南』のモンゴル語と、その類書であるオイラート文語で書かれた「トド文字一百条」・満洲文字で表記された『三合語録』・モンゴル文語で書かれた『蒙古翻訳一百条』との間で対照・比較することによって、『初学指南』のモンゴル語の独自の特徴を考察した。

(4)『初学指南』のモンゴル語の独自の言語的な特徴を、モンゴル語の諸方言のデータ、記録と対照し、その口語の時代的・地域的特色を検討した。たとえば、語彙に関して、語形や意味がモンゴル文語と明らかに異なっている語彙を抽出して、それらを孫竹主編『蒙古語族語言詞典』[1990]、内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所編『蒙漢詞典』[1999]など方言、口語の記録と参照・対照し、方言の特徴を特定した。

４．研究成果

(1) 主な成果：

① 文献学的観点から、『初学指南』と関連文献との比較研究を行い、相互関係を明らかにした。

まず、満洲語の教科書である“tanggū meyen（一百条）”のオイラート文語訳「トド文字一百条」と、モンゴル語訳『三合語録』の存在は、『初学指南』のモンゴル語の口語の実態を明らかにする上で極めて重要であった。すなわち、「トド文字一百条」は、『三合語録』のモンゴル語がオイラート文語の満洲文字表記であることを論証する大きな手がかりになった。それと同時に、『三合語録』と、『初学指南』とのモンゴル語の全文がほとんど対応していることにより、『初学指南』のモンゴル語はオイラート文語またはオイラート方言に特徴的な要素を書き換えて製作されたことが判明された。したがって、両文献は同じオイラート文語のテキストに基づいて製作されたために、それらの異同を検討することによって、『初学指南』のモンゴル語の言語的特徴を見いだすことが可能になった。

また、“tanggū meyen（一百条）”のモンゴル文語訳である『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語は、上記の三つのテキストと別に独自に製作されたことが判明された。しかし、その内容は『初学指南』とほとんど対応しており、『初学指南』のモンゴル語のモンゴル文語と異なる特徴を検討する上では、同時代のモンゴル文語の資料として比較する価値が大きい。

さらに、『初学指南』の著者について考察を行い、『初学指南』のモンゴル語の編纂には、清朝の大学士富俊（1749-1834）のほかにバーリン旗出身の徳勒克（デレク?-1794）が関与していることを指摘した。清朝の大学士富俊は、『初学指南』だけでなく、後に『三合語録』を編纂した人物である。『三合語録』の「序文」には、「バーリン旗出身の徳勒克（デレク）がそのモンゴル語を口語に直した」という記述があり、従来の研究ではそれに従って論じられてきた。しかし、本研究では、『三合語録』のモンゴル語の特徴に基づき、『初学指南』と関連文献との比較研究を通じて、バーリン旗出身の徳勒克（デレク?-1794）は、『三合語録』のモンゴル語を口語に直したのではなく、『初学指南』のモンゴル語を編纂した人物であることを判明した。これは、『初学指南』のモンゴル語の成立の過程を明らかにするだけでなく、同書のモンゴル語の口語の特徴を特定する上で極めて重要な意味をもつ。

② 言語学的観点から、『初学指南』のモンゴル語は18世紀後半の北京周辺のモンゴル語口語である特徴を明らかにした。

音韻体系に関して、まず、『初学指南』のモンゴル語におけるモンゴル文語の VG(g)V（V は母音字を表す）の連続との対応から、文語と異なって口語をあらわしている特徴を明らかにした。モンゴル文語における VG(g)V の連続に対して、多くの現代モンゴル語方言では長母音が対応している。『初学指南』では、モンゴル文語の VG(g)V の連続に対応する表記はすべてが母音間にある子音字 G(g)が表記されず、単母音字、または母音字の連続で表記されている。これは、『初学指南』のモンゴル語はモンゴル文語と異なって、口語の発音を表記している大きな特徴である。また、同じく満洲文字表記モンゴル語であるが、VG(g)V の連続に対応している『初学指南』の表記は『三合語録』の表記と異なる部分が多い。たとえば、aGu＞ao～oo、egU＞eo～uo、iGa＞iya～i など。これは、オイラート文語の正書法、またはそこに現れるオイラート方言の要素と異なる特徴を表しているとみなすことができる。

文法に関して、『初学指南』のモンゴル語における文法的語尾のうち、モンゴル文語の正書法と『三合語録』のオイラート文語の満洲文字表記と明らかに異なる典型的な語尾形を取り上げて、それらの口語の特徴を検討した結果、『初学指南』のモンゴル語の語尾形はモンゴル文語やオイラート文語と明らかに異なっており、口語の発音に近い表記であることが判明された。たとえば、『初学指南』における名詞の曲用語尾の属格語尾-in、奪格語尾+as/+es, +asa/+ese, -nas、動詞の活用語尾の現在・未来形時制語尾=na/=ne、

形動詞の予定形語尾=hu はその例である。

語彙に関して、『三合語録』のゴル語と異なる語彙の表記の状況から、『初学指南』のモンゴル語の満洲文字表記は、ほとんどの場合、文語と異なって口語をあらわしている特徴を明らかにした。『三合語録』のモンゴル語では、オイラート方言・オイラート文語に特徴的な語彙、語形が散見される。こうした語彙、語形と、『初学指南』のモンゴル語との対応からみると、そのほとんどに対して、『初学指南』では異なる表記が対応している。『三合語録』における mur bol=Ji「運がよく」、ashon「晩」、urun「朝」などオイラート方言に特徴的な語彙に対して、『初学指南』では、Jol bol=Ji、udesi、ukle といった別の表現が対応しており、haran「どこへ」、manggadur「明日」、turgun「実家」などオイラート文語だけに見られる語形に対しても、ha、margata、turkum など異なる語形が対応している。また、こうした『初学指南』の満洲文字表記は、『蒙漢詞典』[1999]にみるモンゴル語の発音表記、つまり現在の内モンゴルの標準語の発音表記と類似する点が多い。これにより、『初学指南』の語彙の特徴は、現代の内モンゴル標準語の土台になるチャハル方言に近いことを確認することができた。

一方、上にのべたように、従来、『三合語録』のモンゴル語を口語に直したとみなされていたバーリン旗出身の徳勒克（デレク）が、実際に『初学指南』のモンゴル語の編集者であることは、同モンゴル語の方言の特徴を明らかにする上で一つの大きな手がかりになるが、必ずしも当時のバーリン方言をあらわしているとは限らない。徳勒克（デレク）が長年北京で務めていた経歴を考えると、むしろ当時の北京周辺の蒙古旗人に話されていたことばを記録した可能性が高い。

③『初学指南』のモンゴル語を近代モンゴル語口語の資料として利用する上で注意すべき点を明らかにした。

『初学指南』のモンゴル語を近代モンゴル語口語の資料として利用するには、モンゴル語をあらわしている満洲文字の種類、正書法の制限などを考慮すべきであると共に、オイラート文語に基づいて制作されたことを前提に検討する必要があった。具体的に：

まず、音韻において、モンゴル文語の同じ表記に対応している『初学指南』の表記は、現れる位置や単語によって異なる場合がある。たとえば、iGa＞a/iya、ige＞e/iye、igU＞uo/u など。ここから、『初学指南』のモンゴル語の満洲文字表記は、個々の単語の発音を考慮しながら表記している特徴がみられる。この場合、そこで表記されているモンゴル語音を、満洲文字表記のとおり二重母音、または短母音として受け入れるには満洲文字の綴りの制限を考慮しなければならない。

次に、文法において、現在・未来の時制を表す=nam/=nem といった語尾形の存在によって、当時の口語に=nam/=nem という発音があったかどうかは慎重に考えるべきである。こうした例外とも見られる表記はモンゴル文語やオイラート文語に引かれた表記である可能性が高い。

さらに、語彙において、『初学指南』における Cuk「すべて」、kimda「簡単」、uJuk「文字」などごく一部の語彙は、オイラート方言・オイラート文語に特徴的なものであり、それらに対応するモンゴル文語、また現代の内モンゴルの標準語における意味はそれぞれ「一緒に」、「安い」、「筆の穂、ペン先」である。勿論、これらの語彙が『初学指南』で表記した口語にもオイラート方言と同じ意味で存在していたと推測されるが、『初学指南』でオイラート方言の要素を書き換える際に、意味の細部に至らず、そのまま満洲文字で表記したとみなすべきであろう。

要するに、『初学指南』のモンゴル語の口語・方言の特徴を検討する場合、モンゴル語諸方言を参考にするとともに、その元になるオイラート文語や方言の影響など、同書の成立の過程、編纂された方針を考慮しなければならない。

④ 近代モンゴル語の口語資料として『初学指南』の電子化テキスト、モンゴル語の全単語・語尾索引を作成した。

『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の音韻・文法・語彙的特徴を究明するにあたって、テキスト間の比較、検索プログラムによる音韻的要素や文法的語形・語尾の抽出などを行うために、満洲文字表記モンゴル語にローマ字転写を施し、電子化テキストおよび名詞・動詞語尾索引を作成した。これは、研究の一環として整備されたものであるが、近代モンゴル語口語のデータ資料として学界に提供することを前提とした。

(2) 位置づけとインパクト：

①『初学指南』のモンゴル語の言語的特徴および口語方言を特定したことにより、従来の研究で明らかにされていなかった中世モンゴル語から現代モンゴル語に至るまでの変化の過程を知る上で一つの手がかりになる。

② 本研究は、近代モンゴル語の研究において満洲文字で表記された口語の資料を対象とした初めての研究である。『初学指南』のモンゴル語の電子化テキスト、全単語および名詞・動詞語尾索引を作成することに

よって、研究者たちが近代モンゴル語のデータ・資料として効果的に利用することができる。

③ 本研究によって、モンゴル語学・モンゴル語史・モンゴル語文献学の分野だけでなく、『初学指南』が成立し、利用された清朝時代の社会的・歴史的な背景を解明するさらなる研究へと発展していく可能性が提示される。

(3) 今後の展望：

①『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の言語的特徴をまとめて、『日本モンゴル学会紀要』(2014) に投稿する予定である。

② 近い将来本研究の成果を、近代モンゴル語に関する学術図書・資料として出版することを目指す。

③ 筆者は、『初学指南』と『三合語録』のモンゴル語を研究することによって、清代における満洲文字で表記されたモンゴル語の教科書には近代モンゴル語の時代的かつ地域的特徴が反映されている事実を突き止めた。これらのほかに『満蒙漢話條五十四段』、『蒙古語話し言葉七十三段』、『満蒙漢字書』、『満蒙話條』、『満蒙漢三体字書』など満洲文字表記モンゴル語の教科書を調査・入手しており、清代における満洲文字表記モンゴル語の教科書に関する体系的な研究を行う計画を立てている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
スチンバト、「近代モンゴル語の学習書『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語について」（発表要旨）、『日本モンゴル学会紀要』、査読無、第 43 号、2013、93－94。

〔学会発表〕（計１件）
スチンバト、「近代モンゴル語の学習書『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語について」、日本モンゴル学会、2012 年 11 月 17 日、愛媛大学。

〔図書〕（計１件）
スチンバト（斯欽巴図）、東北大学出版会、『「三合語録」における満洲文字表記モンゴル語の研究』、2012、552。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
斯欽巴図（SIQINBATU）
東北大学・東北アジア研究センター・教育研究支援者
研究者番号：70590199

(2)研究分担者
なし　（　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　（　）

研究者番号：